

私は、西都原考古博物館に勤務して2年目である。

2年前の3月、人事異動内示の日、私は諸事情により仕事を休んで自宅にいた。県埋蔵文化財センターでの在籍年数は長かったが、育児休業から復帰したばかりということもあって、異動なんてあり得ないし他人事のように考えていた。

昼前に自宅の電話が鳴った。西都原考古博物館への異動を告げる内容であった。2012年4月、私の考古博物館勤務の始まりであった。全く畑違いの仕事ではなかったが、不安は隠しきれないものがあった。

4月4日、考古博物館に来て4日目、美術品専用運搬車、略して美専車に乗って、鹿児島県まで展示資料の借用に同行した。資料借用に関するノウハウを初めて体験した時であったが、聞いたことのない言葉があちこちで飛び交い、何とも言えない雰囲気の中での資料の扱いにはかなりの緊張感があった。その後、国指定重要文化財の資料を移送させる業務に携わったが、その時も緊張のため手が固まってしまう、思うように手が動かせなかったことを思い出す。埋蔵文化財センター時代に土器や石器など考古資料をたくさん手にしていたはずなのに、急にその資料は私にとって取扱いがとても恐ろしい存在となってしまった。

当館が行っている特徴的な仕事の一つに地中探査がある。これも私の業務の一つである。地中探査は、発掘調査を行わずに、非破壊的手法で地下の情報を得ることができる優れたものだ。地中探査を行っている現場を私が初めて見たのは十数年前で、出会いはやはりこの西都原古墳群であった。大きな器材を引っ張って、数をカウントしていた天理大学の学生さん達の姿が今でも記憶に残っている。まさかその仕事を私がすることになるとは！？ 昨年は、失敗をして多くの迷惑を掛けてしまった。まだまだ半人前以下であるが、この仕事との出会いをきっかけに、何か宮崎県の埋蔵文化財のためにお役に立てればと思う。

この他、考古博講座や体験講座などの教育普及関係、企画展も担当した。考古学自体が専門的で、その中の時代、分野などさらに専門性が深まる。よって、いずれの業務を担当する場合も、自分が知っている事ばかりとは限らず、常に知識の蓄えが必要となる。この歳になってこんなに勉強するとは・・・と思うくらい今までの自分の不勉強さが身に染みる。

考古博物館の仕事は、常にクリエイティブ（創造的）であり、こんなに自分の考えが反映できるものはないと思うが、その一方で責任も重大である。私は、長く埋蔵文化財の仕事をしていて、辛いこと、苦しいことがあっても、やっぱり私にはこの仕事が合っているのだと思っていた。仕事は、自分に合わなくてもしななければならない時もあるが、できれば好きになって、楽しくやっていきたいと考える。博物館の仕事は、おそらく自分がこれまで求めていたものに近いものはずなのに、自分の能力をはじめ、今、自分が置かれている立場を客観視しながら、これでいいのか・・・？と自問する。「四十にして惑わず」。そんなことはない。迷いっぱなしの40代である。

そんな日々の中、2年目を迎えたわけであるが、考古博物館では、今までの自分にはないものを得る機会がたくさんあった。それは人との出会いを通してである。

当館は、国際交流事業や他館との交流の中で、韓国や台湾をはじめとする海外の人たちが訪れる。その中で、考古学を国内だけではなく東アジア、または世界という広い視野で捉えられるようになったことは勿論のこと、異国の歴史、文化、思想を知るきっかけにもなっている。また、業務をとおして、そして調査、研究で来館される国内の関係者との出会いの中で、いろいろな意味で刺激を受ける機会が多くある。自分が落ち込んでいるとき、そのパワーに勇気づけられる。このように、自分の世界が少しだけ広がってきていることも確かである。

組織の職員数が少ないため、自転車操業の毎日で、限られた時間の中で皆が納得するものを生み出すのはそう簡単なことではない。苦しいし、どれだけ投げ出して楽になりたいと思うことか……。でも、どうしようもない時は仲間や家族が手を差し伸べてくれた。感謝するばかりである。いつも足を引っ張っている自分であるが、皆にどこかで恩返しできたらと思う。

(学芸普及担当 高橋浩子)